

1月14日(土)に神奈川教区核問題小委員会主催の「飯館村の母ちゃんたち 土とともに」の映画会に行きました。この映画はパレスチナ難民のドキュメント映画を製作した監督古居みずえ氏の作品です。東日本大震災の地震、津波により、「安全、グリーン、経済的なエネルギー」と喧伝されていた原発は、爆発事故を起こしました。そして、「被害甚大、制御不能、費用が莫大なエネルギー」であることを証明しました。悲しく、つらい映像でした。映画はDVDの音響の設営があまりよくなく、聞こえず、登場人物の方言が理解しにくく、正確な話の内容を知ることが出来ませんでした。



けれども、飯館村が避難地区になり、住民が突然、すべてを捨てて、逃げ出さなければならなかったこと、家族は勿論、農村の地域社会がバラバラにさせられたこと、長年手塩にかけて豊かな土地を作り上げてきたのに、除染によって土地は剥ぎ削られ、農業、酪農の基盤を失ったこと、将来の展望が見えないことなど、あまりに大きい苦悩を背負わされたことが痛いほど分かります。飯館村から避難した二人の婆(母)ちゃんが、厳しい人生を、慣れ親しんだ自然の生命の力に触れて、癒され、「笑ってねえど、やってらんねえ」といって、助け合いながら淡々と生きている姿を描いています。女性の逞しさ、婆ちゃんの優しさが、仮設住宅での生活を耐えさせています。彼女たちは「原発について何も知らなかった」と言っています。日々の生活に追われ、国がすることに黙って従い、社会的な問題には関心を持ち得ませんでした。これが日本の庶民の現実でしょう。けれども、結果が出ました。国、東電は彼女たちの苦悩に責任があります。賠償する責任があります。私たち国民も、彼女たちだけに苦悩を負わせず、共感し、できる限り助け合い、この苦境を乗り越えていかなければなりません。

福島原発は爆発し、大量の放射性物質を大気に飛散させ、福島のみならず、大規模に関東の大地を汚染し続けています。事故直後の放射線量より低くなっているとはいえ、放射線モニタリング情報/文科省 <http://new.atmc.jp/pref.cgi?p=07#p=075f4c2dede5fc1a80> によれば、福島県の最高値の地点では、今も平常値の144倍を示しています。飯館村の放射線量は5倍です。

環境省の除染の進捗情報 <https://www.env.go.jp/jishin/rmp/conf/13/mat02.pdf> では、飯館村は宅地除染がおおむね完了とされ、帰還を勧められています。全村の24%が除染済とされていますが、生活基盤の農地、山林は手付かずです。福島全県の面積で見れば、除染された土地は0.02%にもなっていません。ひとたびまき散らされた放射性物質は短期間に溶けて、流れて、消えていくものではなく、大気、土壌、地下水に残留し続け、循環し続けているのです。除染の効果は不明です。宅地の一部に放射性物質を含む土等が、プレコンバッグで積み上げられています。

また、3つの炉心はメルトダウンし、その正確な状態は、東電の当事者でも不明です。建屋の敷地に流入する地下水が汚染水となるため、それを汲み取り、除染、浄化したり、凍土方式による遮水壁の設置など、対策が採られています。効果は限定的だと言われています。汚染水が大平洋に流れているのは周知の事実です。福島はあまりにも危険です。代償が大きすぎました。